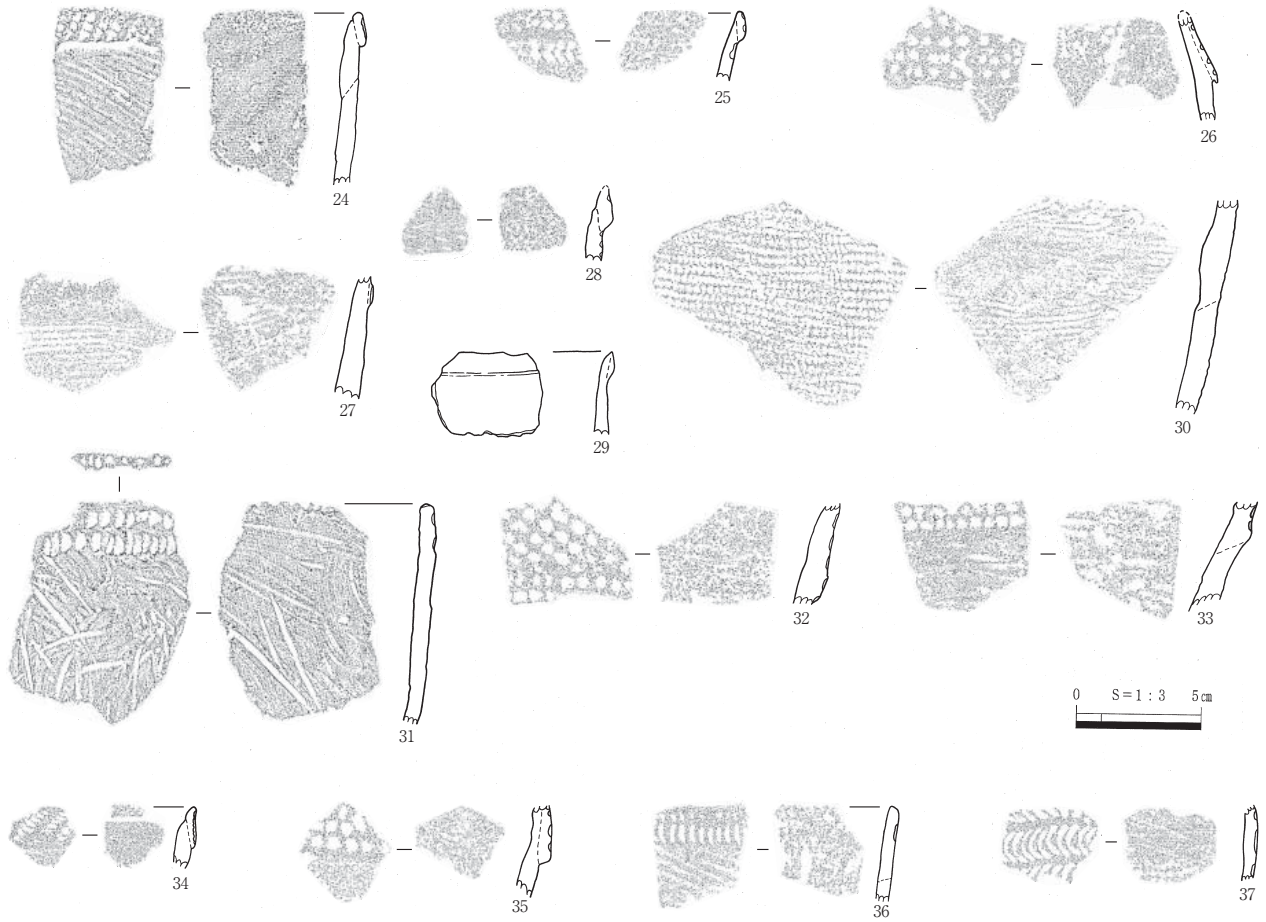




第29図 自然流路出土縄文土器(早期末～前期初頭)



第30圖 遺構外出土繩文土器(早期末~前期初頭)



第31圖 遺構外出土繩文土器(後期~晚期)

第4章 古墳時代以前の調査

24・27・34は肥厚帯に貝殻腹縁による連続刺突が施される。25は細い肥厚帯をもち、肥厚帯とその直下に半裁竹管によるC字の連続刺突が見られる。26・28・35は肥厚帯に棒状工具による連続刺突が施されている。このうち、26・35の肥厚帯は幅広で、連続刺突が複数列施されている。28は体部にも施文が認められる。先の薄い工具で横向きに浅く刻まれている。29は無文の肥厚帯をもつ土器である。32・33は屈曲部をもつ体部片である。接合しないが同一個体の可能性が高く、33の上方に32が位置するものとする。屈曲部直上には棒状工具による押し引き状の連続刺突が施される。

21は早期末から前期初頭に帰属する土器の底部である。胎土には繊維混入が確認できる。

(4) その他の前期土器(第29・30図、PL.70)

西川津式を除く、その他の前期刺突文土器は縄文流路出土の22・23(第29図)、遺構外出土の31・36・37(第30図)の計5点である。内外の調整は条痕又はナデが施される。

22は体部片である。ナデ調整の後、貝殻腹縁による爪形文状の連続刺突が3列以上施される。施文のパターンは羽島下層I式に類似するが、刺突間隔が広く、西川津式に含まれる可能性もある。

23は条痕地で、口縁部に棒状工具による押し引き状の連続刺突が2列施される。月崎式であろうか。

31・36・37は羽島下層I式と考える土器である。31は口縁端部に刻み、口縁部にD字の連続刺突を2列施す。外面の条痕は粗く不定方向に施されているのが特徴的である。36は口縁端部からやや下がった位置にC字の爪形文1列が施される。37は体部片で3列以上のC字の爪形文が認められる。

4 中期以降の土器(第31図、PL.70)

帰属時期を明らかにできた土器は、中期初頭(鷹島式)1点、後期有文土器4点、後期から晩期粗製土器75点、晩期突帯文土器3点である。このうち6点を図化した。

38・41～43は後期の土器である。38は鉢の口縁部である。口縁端部には刻みが施され、調整は貝殻条痕の後、ナデで仕上げられる。41は屈曲部を含む破片で、屈曲部の上半は条痕地で、屈曲部にはヘラ状工具による連続刺突が施される。図化していないが、同一個体と思われる破片の観察から屈曲部下半の地文は縄文である。42・43は後期土器の底部で、いずれも平底である。39は後期から晩期の粗製土器の深鉢で、内外面ナデ調整である。40は突帯文土器で、砲弾形を呈する深鉢である。口縁部は緩やかに外反し、刻目突帯が端部に接して巡る。刻みは浅い。内外面の調整は条痕またはナデである。

第5節 石器

1 概要(表9・10)

(1) 組成

石器は、縄文時代の遺構及び包含層から2,278点(61,128g)、古代以降の堆積層から2,494点(44,218g)、合計4,774点(105,347g)が出土している。後述するように、本遺跡では弥生土器も少量出土しているが、それらはすべて弥生時代後期のものであり、古代以降の堆積層から出土した石器も基本的にすべて縄文時代に帰属すると考える。

表9に器種別・石材別の点数・重量組成を示した。点数にして出土石器の約98%は打製石器が占めている。打製石器の内訳をみると、石器器種が376点、石核・剥片などの残滓類は4,284点を数える。残滓類が打製石器全体の約92%を占めており、遺跡内で石器製作が行われていたことは明らかである。石器器種では、石鏃・石鏃未製品が124点と最も多く、定形器種の主体となることから石鏃を主に製作していた可能性が高い。定形器種では石鏃に次いでスクレイパーが53点と多い。また、加工痕

のある剥片・使用痕のある剥片の出土数も非常に多く、定形器種以上の点数が出土している。残滓類の内訳は、剥片・碎片が3,946点を数え残滓類の約92%を占めるほか、両極剥離痕のある石器¹⁾・削片が163点、石核が133点、ブランクが40点出土しており、両極剥離痕のある石器と石核の出土数が非常に多い。原石は出土していない。

(2) 石器石材

使用石材の主体は黒曜石で、黒曜石製石器は4,541点(9,390.3g)出土しており、石器全体の約95%を占める。次いで、デイサイトや角閃石安山岩などの大山起源の火山岩(以下、これらを粗粒軟質安山岩と総称する)を使用した石器が多く108点が出土しているほか、安山岩製が89点、頁岩製が31点出土している。その他の石材を使用した石器も僅かながら認められ、流紋岩製が1点、凝灰岩製が3点見られる。これらの石材のうち、黒曜石、安山岩、流紋岩は打製石器に、粗粒軟質安山岩は礫石器に、頁岩は磨製石器に、凝灰岩は打製石器と磨製石器にそれぞれ使用されている。

黒曜石と安山岩については出土資料から20点を抽出し、蛍光X線分析による産地同定を行った(第7章第2節)。産地同定に先立ち、同定の結果と外観的特徴を比較することを目的として、肉眼観察による石材分類を行った。

黒曜石は3点の分析を実施し、外観的特徴に関わらずすべて隠岐久見産と判定された。同じ産地であっても、外観的特徴にバラエティーが存在することはすでに確認しており(鳥取県埋蔵文化財センター-2011)、本遺跡のものについても同様な傾向が認められる。

一方、安山岩については、a~hに分類して産地同定結果と比較し、さらに西坪上高尾原遺跡で実施した同様の分類と産地同定結果とも比較している(表10)。外観的特徴による分類で主体となるのはサヌカイトを想定して抽出した分類aで68点を確認した。このうち5点を分析し、金山東1・2地点が3点、来峰・法印谷(五色台)が1点、原田1遺物・平田No.12遺物群が1点と判定された。この結果を得て改めて資料を観察したところ、金山東1・2地点、来峰・法印谷とされたものについては肉眼での区別は困難であった。原田1遺物・平田No.12遺物群と判定された資料は、他の分類aに比べて風化が強い点で特異な資料であった。分類aのうち分析を行わなかったものは、香川県金山東産・五色

表9 石器器種組成(総点数・総重量)

	石鏃	石鏃未製品	スクレイパー	尖頭器	石鏃	石鏃未製品	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	剥片・碎片	両極剥離痕のある石器	両極剥離痕のある石器削片	石核	ブランク	石器破片	打製石斧	磨製石斧	石鏟	磨石	敲石	台石・石皿	凹み石	石材別計	
黒曜石	76 55.4	34 46.1	49 631.8	2 4.6	3 3.9	2 1.96	122 831.5	56 692.4	3867 375.4	149 805.1	8 12.9	130 2095.0	40 447.1	3 12.1									4541 9390.34
安山岩	13 12.2	1 4.0	4 80.4				5 16.5		57 132.1	5 60.4		2 77.4		1 4.7	1 85.7								89 473.33
流紋岩											1 2.4												1 2.40
頁岩							2 51.0		21 48.1			1 227.0		1 13.3		5 616.2							30 955.58
凝灰岩									2 36.1							1 23.6							3 59.66
粗粒軟質安山岩																	7 920	83 50325	12 6113	5 36442	1 666	108 94466	
器種別計	89 67.5	35 50.1	53 712.2	2 4.6	3 3.9	2 2.0	129 899.0	56 692.4	3947 3966.8	154 865.5	9 15.3	133 2399.4	40 447.1	5 30.1	1 85.7	6 639.8	7 920	83 50325	12 6113	5 36442	1 666	4772 105347.31	

* 各欄内数字は、上段が点数、下段が重量(単位はグラム)。重量は欄ごとに四捨五入している。

表10 安山岩製石器の外観的特徴による分類結果

下市築地ノ峯東通第2遺跡分類			西坪上高尾原遺跡 分類との比較	産地同定結果
分類	外観的特徴	出土 点数		
a	灰白色～暗灰色。緻密かつガラス質。節理発達し、縞模様を呈するものが多い。	68	分類ウ相当 (金山東)	金山東1、2地点/来峰・法印谷/ 原田1遺物・平田No.12遺物群
b	暗灰色。緻密。剥離面表面は平滑で、リングと凹凸がよく発達する。表面にガラス質結晶・長石が少量見られる。	4	分類エ相当 (三朝町坂本)	加茂/二上山
c	灰白色～灰色。風化強く、表面がややざらつく。フィッシャーが発達。表面にガラス質結晶・長石が見られる。	4	該当なし	下市築地ノ峯A遺物群
d	褐色があった暗灰色。風化強く、表面がざらざら。表面に長石多く見られる。	1	分類オ相当 (三朝町坂本)	下市築地ノ峯14遺物群
e	暗灰色。節理が発達し、fに類似するが、色調が暗く、緻密。表面に長石が多く見られる。	1	該当なし	下市築地ノ峯A遺物群
f	灰白色。a～eのいずれよりも風化強い。節理が非常に発達する。	7	分類イ相当	下市築地ノ峯A遺物群
g	暗灰色。緻密かつガラス質特に強い。表面に微細なガラス質結晶多く見られ、新鮮面もガラス光沢をもつ。	1	分類アに近い (加茂)	加茂
h	灰色(サヌカイト的な色調だがaより白っぽい)。緻密で均質、節理発達しない。剥離面表面には凹凸が発達する。	1	該当なし	二上山

台産安山岩(サヌカイト)と判定された資料と特徴が近い。したがって、本遺跡出土安山岩の主体は香川県金山東産・五色台産サヌカイトである可能性が高い。

湯梨浜町麻畑産安山岩を想定して設定した分類bには4点が帰属する。このうち3点を分析した結果、予想に反して1点が隠岐加茂産「黒曜石」、2点が二上山産と判定された。加茂産「黒曜石」とされた資料はガラス質が強く、分類bの中でもさらに分別可能である。なお、同じく加茂産「黒曜石」という分析結果を得た分類g 1点は非常にガラス質が強く、明らかに他の安山岩と異質で、加茂産「黒曜石」と判定された西坪上高尾原遺跡分類アとも外観的特徴が近似している。色調やガラス質の強弱などによって、加茂産「黒曜石」が抽出できる可能性が高いだろう。

分類c～fは大山系火山由来の無斑晶安山岩を想定した分類で、予想通り産地不明遺物群となった。

分類hは外観の特徴で二上山産サヌカイトの可能性を予想できたほど他の安山岩とは異質であった。ただし、これと分類bのなかで二上山産と判定された資料の外観は類似していない。

以上のことから、肉眼分類での産地推定の有効性が高そうなのは香川産サヌカイト(分類a)と加茂産「黒曜石」(分類gとbの一部)、在地系無斑晶安山岩(分類c～f)といえよう。

このように、肉眼分類と蛍光X線分析から本遺跡出土安山岩は香川県金山東産・五色台産サヌカイトが主体である可能性が高いといえる。西坪上高尾原遺跡出土の安山岩も同じく香川県産サヌカイトが主体となるものの、本遺跡では奈良県二上山産サヌカイトが認められるのに対して、西坪上高尾原遺跡では出土していない点と、西坪上高尾原遺跡では三朝町坂本(本報告書では湯梨浜町麻畑に修正)産の安山岩が確認されているのに対し、本遺跡では出土していない点が異なっている。

2 分布状況(第32～36図・表11～20)

石器の分布状況を把握するため、地区別(表11)とグリッド別(表12～20)に組成表のほか、グリッド別石器出土点数を階級分けして示した分布模式図を掲載した(第32～36図)。縄文土器と同様に、古代以降の遺構から出土した石器については、出土したグリッドの古代以降堆積層の点数に加算した。ただし、古代流路出土の石器については、下層にある縄文流路から混入した可能性が高いことから、その他のものと分けて出土点数の内訳を示している。

表11 石器器種組成表(地区・石材別点数)

帰属	地区	石材	器種	石鏃	石鏃未製品	スクレイパー	尖頭器	石錐	石錐未製品	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	剥片・碎片	両極剥離痕のある石器	両極剥離痕のある石器削片	石核	ブランク	石器破片	打製石斧	磨製石斧	石錘	磨石	敲石	台石・石皿	凹み石	石材別計	地区別計			
																											23 9.4	18 19.1	27 394.4
縄文遺構・包含層	1区	黒曜石	2	1.1						1	3	119	1	1	3	1										43 210.7	2126 22792.8		
		安山岩								1	28.6	10.3			1	227			2	137.4								1 2.4	
		流紋岩																										13 403.3	
		頁岩																				29 16389	6 2428					35 18817	
		粗粒軟質安山岩																										132 217.0	
	2区	黒曜石	1	0.8	1	2.2					1	2.2	119	1	1	3	1										4 0.8	152 38336.0	
		安山岩											2							1	62.2						3 65.1		
		頁岩											2														2 36.1		
		凝灰岩											2														10 38017		
		粗粒軟質安山岩																			1	266	6	3637	1	474	2		33640
器種別計				26 11.5	19 19.9	29 424.7	2 4.6	2 1.2	0	54 554.0	21 61.5	1903 1270.2	72 330.6	7 10.7	73 1146.1	19 169.9	2 4.8	1	85.7	3	199.6	266	35	7	2	0	合計 2278 61128.9		
古代以降堆積層	1区	黒曜石	40 38.9	15 26.2	17 224.6		1 2.7	2 2.0	59 285.4	30 588.9	1702 2359.2	72 451.0	2 4.6	53 1063.0	18 260.8												2011 5307.3	2087 34350.1	
		安山岩	7 9.3	1 4.0					4 14.3	15 43.7	3 32.4					1 4.7											31 108.3		
		頁岩							1 22.3	7 34.4						1 13.3			1	380.6							10 450.6		
		粗粒軟質安山岩																			2	252	28	4	1	666	35 28484		
	2区	黒曜石	12 6.0		4 10.7				11 23.0	5 42.0	315 203.4	6 29.1		6 175.1	3 16.5	1 0.8												363 506.6	405 9868.3
		安山岩	3 1.8		3 52.2						2 61.8	1 22.5		1 15.2														9 153.6	
		頁岩									3 0.6									1	36.0						5 36.6		
		凝灰岩																			1	23.6					1 23.6		
		粗粒軟質安山岩																			4	402	20	1	3		28 9148		
	不明	安山岩	1 0.5																								1 0.5	1 0.5	
器種別計				63 56.5	16 30.3	24 287.5	0	1 2.7	2 2.0	75 345.0	35 631.0	2044 2696.6	82 535.0	2 4.6	60 1253.3	21 277.2	3 25.3			0	3	6	48	5	3	1	合計 2494 44219.0		

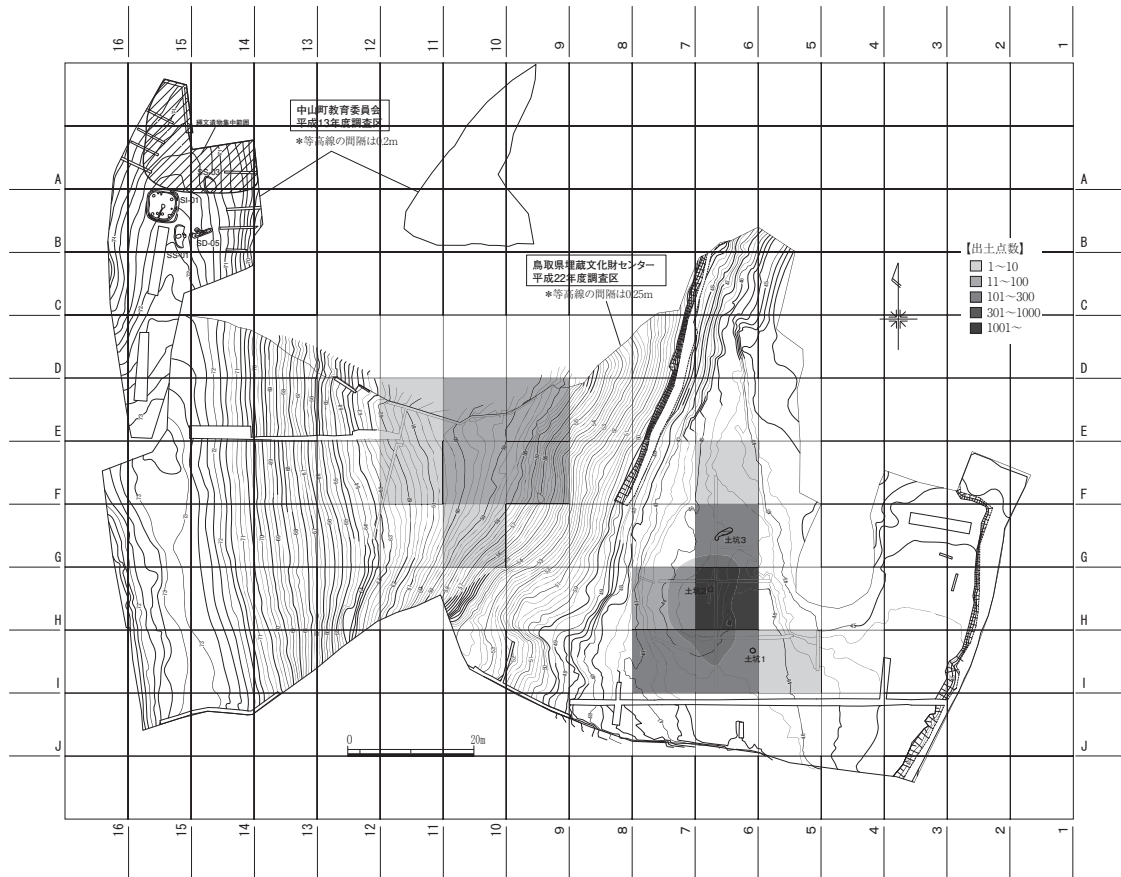
※ 各欄内数字は、上段が点数、下段が重量(単位はグラム)。重量は欄ごとに四捨五入している。

表と模式図から石器の分布は遺跡内全体に広がるものの、とくに1区G6グリッドを中心とする縄文流路とその上層に分布が最も集中し、次いで2区D10グリッドを中心とする丘陵テラス部に分布が集中することが分かる。この分布状況は、縄文時代早期末から前期初頭の土器の分布と一致することから、石器の大半も縄文時代早期末から前期初頭に帰属する可能性が高い。

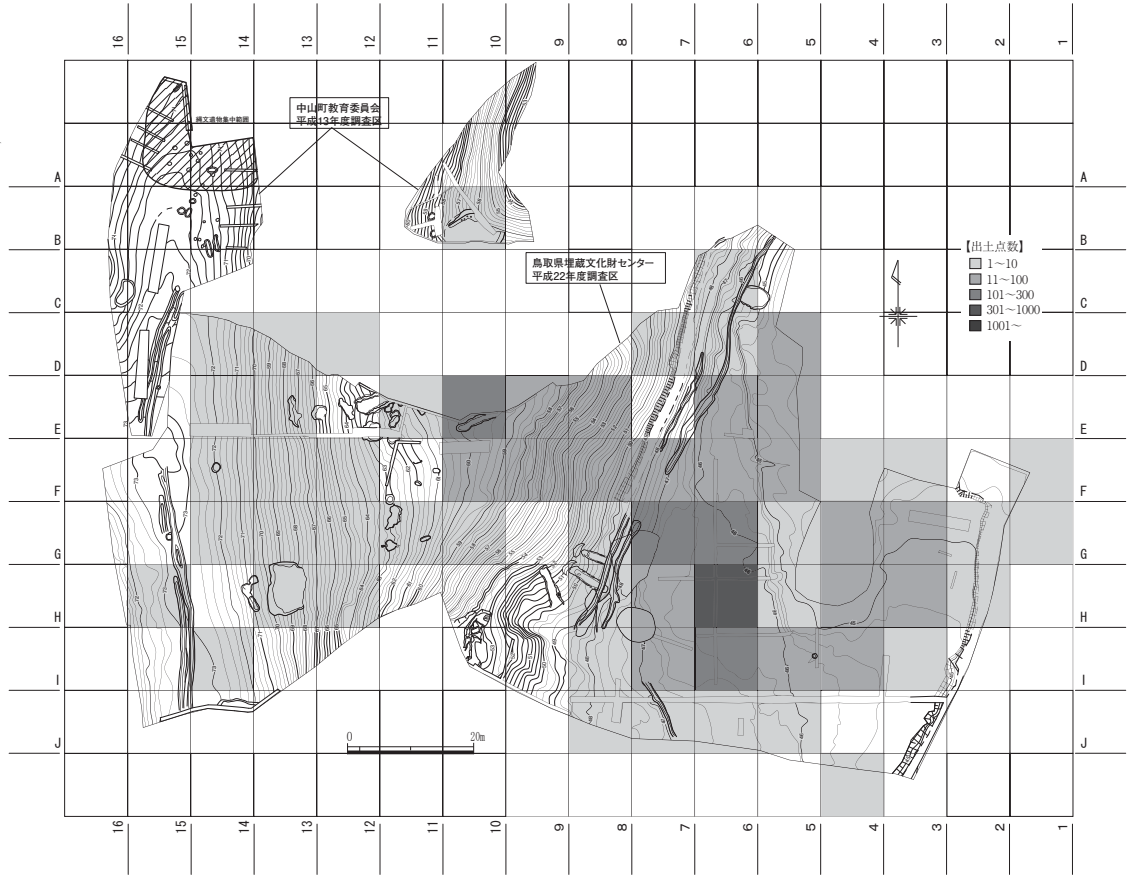
地区毎に分布状況を概観すると、1区では、前述のようにG6グリッドを中心とする範囲に石器が集中し、とりわけ黒曜石製石器の出土量が極めて多い。なかでも、剥片や石核などの残滓類が主体を占めることから、石器製作を行っていた可能性が極めて高い。安山岩も出土量は少ないものの、同様な分布傾向を示している。また、頁岩製石器が集中して出土した点も特徴的で、磨製石斧の製作やリダクションなどの打削作業に伴う資料を確認した。その他に礫石器も多く出土している。

一方、2区では、1区では見られない台石が主としてテラス部で5点出土した点が注目される。ま

第4章 古墳時代以前の調査



第32図 黒曜石製石器出土数量分布図(縄文遺構・包含層)



第33図 黒曜石製石器出土数量分布図(古代以降堆積層)